夕霧姉はさすが、看護師だから人の死には慣れているのだろう。てきぱきと動き出した。
家だと、ぽわぁ～んとしているのに、ちょっと見直す。
「じゃ、はかなちゃんのお身拭いをするから、ナギくん出てって」
「え！　お身拭い！？」
下りきったテンションが、わずかに上がった。
「お身拭いというと、あの、亡くなった人の体を拭いたり、下着を取り替えたり、鼻に綿を詰めたりする、あれですか？」
「なんでちょっと、テンション上がってるの？」
「どうして、外に出ないとならないんですか？」
「質問に質問で返さないで。あぁ、お姉ちゃん、ちょっと頭が痛くなってきたよ」
心底、あきれた表情で夕霧姉はいった。
その横で、はうぅ、と、かおる子さんがもたついてる。
「キミ……正気なの？　はかなちゃんは亡くなったとはいえ女の子よ」
「夢にまでみた妹の裸体を、やっと拝めるチャンスなんですよ！　これを逃したら一生、はかなのまな板を見ることができない」
「はかなちゃんが生きてたら絶対に、ぶん殴られてるよ」

巨乳が、何をほざく。
だが、阿佐院先生がいなくなった今、ここの責任者はあくまで夕霧姉である。
「おねげーいたします。お従姉さま！」
俺は土下座した。
「はかなの！　はかなのお身拭いを見せてください。拭くのとか、いっぱい手伝いますから！」
「単に妹の裸体を触りたいだけでしょ！」
ちっ、バレてりゃ。
夕霧姉も、かおる子さんも、本気で引いているのがわかった。そりゃそうだ。一歩、間違えなくとも猟奇的にとられかねない発言だ。
しかし、女はとにかく押しに弱い生き物だ。「ラブホテルの前で土下座し続ければ、三人に一人はやらせてくれる」と、エロ本のコラムで読んだばかりである。
母性本能に訴えるのだ！
俺は床に寝転がり、駄々をこねる。
「見たい見たい見たい見たい！　火葬される前に、はかなのおっぱい見たい！」
「うわぁ……」
初対面のかおる子さんが、どんどん汚物を見るような眼で俺を見てきます。なにこれ、どこで脳内選択

肢、間違えた？
「携帯の待ち受けにするから、写メだけでも撮らせてください！」
「しつこい」
「じゃ、ムービーだけでも！」
「この人、倫理観ゼロですぅ」

「あ、あの……首かじりさん？」
「なんぞな？」
「二、三、質問いいですか？」
「なぬ！？　かまってくれるのかや？　どどんとこいでおじゃる！」
パッと顔を輝かせる魑魅魍魎。
……素直だな、妖怪。
「妖怪というのは、百歩譲っていいとして（いいのか？）……なんで死体の首なんかかじってるんす

か？」
「そんなの……うふっ☆　〝かにばりずむ〟に決まっとるぞな！」
『うふっ☆』じゃないだろ！　意外に病んだことをドヤ顔でいってるぞ！？」
「……フッ、あの日、戦場で貪り食った味が忘れられないだけじゃ」
「ベトナム帰還兵か？」
「こっ、これじゃ……！　わしがあの日食べた、生首の味は！」
「将太の寿司かッ！」
「そりゃそりゃそりゃ♪　生首音頭で、よよいのよい♪」
「ホント、何しに来たんすか？」
踊って誤魔化そうとする妖怪に、俺が冷たくいい放つ。
「帰ってください、墓場に」
妖怪首かじりは再び、百点満点の笑顔でうったえてくる。
「首・かじらせて☆」
「だ・め」
ぶぅ、と童女が頬を膨らませる。
か、かわいい……。

「飴ちゃんあげるから、機嫌直せよ」
「わーい♪」
首かじりは俺のポケットに入っていたホールズ的な飴を小さな掌で受け取ると、「すーすーするでおじゃる！」と、にこにこしながら舐めだした
……アホな子だ。
「で、おぬしはなんで、死んだ妹のオッパイを揉んでいたのじゃ？」
「今、そこに戻りますか！？」
「そういえば、昔、おぬしのような少年が居たのを、我はよく覚えておる……」
「え？　過去にも、そんなことが……！」
俺は真顔になった。
もしかしたら、首かじりが事件に関する重要な情報を握っているかも知れない。
「……そう、あれは十年前……その少年は、寝ている〝つんでれ娘〟に『アスカ！　起きてよ！　起きて僕を叱ってよ！』とかいって、ぶっかけ……」
「エヴァ旧劇の話かよっ！」
色んな意味でガッカリだった。
「我は式波より惣流派……」

「うるさいよ！」
俺は香炉から特大線香を抜き取り、首かじりの鼻先へと持って行く。
「けふっけふっ」と涙目になって可愛らしい声でむせだした。